

## 南アフリカ訪問記

「アジア・アフリカと共に歩む会」は、この一年半の間に4万冊の本を南アに送ってきたが、今回、野田千香子と下谷房道が初めて、送付先の南アを訪ね、受け取り先の組織やいくつかの学校を訪れ、多くの人びとと会い、要望や感想を聞き、親交を深めてきた。

1994年3月23日から4月1日の日程で南アフリカを訪問。ヨハネスブルグ近郊のベノニに3泊、ダーバンに2泊、さらにベノニに2泊、計7泊の旅であった。以下、その概略を簡単に記したい。

## 白人の町と隣接する黒人居住区

ベノニで英語の本を受け取り、黒人の学校に分配しているのは、EAST RAND EDUCATION FORUMのデイヴ・ペントレイ氏(白人)が中心となっている。氏はアングロ・アメリカンの鉱山技師であり、メソジスト教会に通うクリスチャンである。ベノニは豊かな白人の住む市だが、その近くにデヴェイトンという黒人居住区がある。両地域の生活の落差はマスコミの伝える通りだが、ペントレイ氏はこの両地域を一つのものにし、人種のミックスされた学校を作りたいという夢の持ち主であった。車による移動図書館の構想も含め、今後も良い関係を作っていける人物である。

EAST RAND EDUCATION FORUMではメソジスト教会の場を借りて土曜日に行なう高校生などを相手にした自主的な補習や、成人に対する識字教育など、黒人のための様々なプロジェクトをボランティアで行なっている。



本を送っている学校の一つであるデヴェイトン地区の小学校で歓迎を受ける筆者(下谷)

ベントレイ夫妻の友人であるクローディア(白人)の参加するTRAINING AND DEVELOPMENT FOUNDATION という組織では黒人の先生の再教育が行なわれ、黒人の先生たちはそれを地域に帰って実践していくというプロジェクトを行なっていた。われわれが訪れた時には本を薪として伐採せずにすむソーラークッキングや大豆を勧める栄養、調理の講座が開かれていた。このように白人の側で様々な取り組みが行なわれており、感心することが多かった。

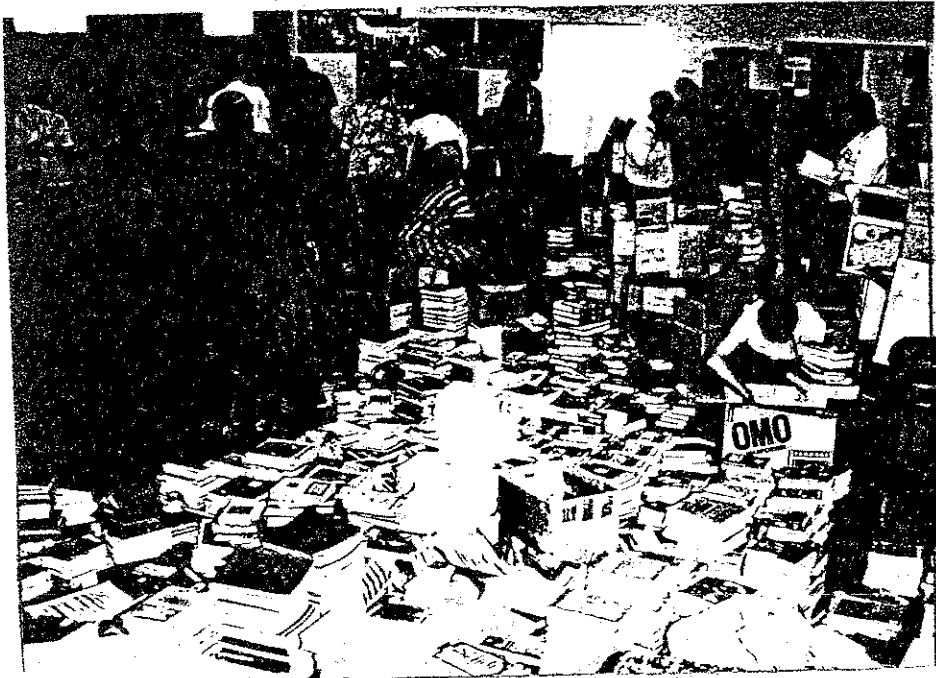
しかし一方で白人と黒人の生活を往復する中で、その落差の現実も動かしようがないものだった。白人の家の警備の厳重さも大変なものである。また白人たちも情報を制限されてきたので、この国についてよく分かっていないことが多いようだった。南アでは白人の人口の方が多いと信じていた白人の話をきいた。それは極端としてもアパルトヘイトを含んだ歴史は十分に学ばれていない。歴史の本は白人にも大変に重要である。

#### 黒人の先生たちと送った本の分類、分配作業をする

肝心の本について述べる。ベントレイ氏は当初われわれの送った古本を個人的に仕分けして、細々と分配していたようだ。現在は教会の場を借りて、黒人の学校の先生を集め、本を一気に分類、分配し、持って行ってもらっている。われわれの行った時には、約30校の学校の先生が集まり、われわれと一緒に本の分配を行なったが、実に喜んでもらったのが強く印象に残っている。ある先生は誰かの結婚式に出席するために中座し、また戻ってきて、本を持っていった。

#### 著しい本の不足

確かに学校に本がない。われわれの訪問した学校はデヴェイトンでは3校。たとえ図書室はあっても本はごくわずかしかない。授業中の生徒の机の上にはほとんど本がのっていない。教室の照明は暗く、建物もところによっては大きな穴があいている。授業もひどい時には1クラス100人を数える。先生の養成も急務だ。現在、教鞭をとっている先生もまだ多くのことを学ばなくてはならない状態だ。そんな中で先生方もいろいろ努力をしている。先生の一人、パトリシアは暴力事件の多発する黒人居住区に住んでいた親戚の



黒人居住区近くの小さな教会で40人の黒人の先生と本を広げ、分ける。

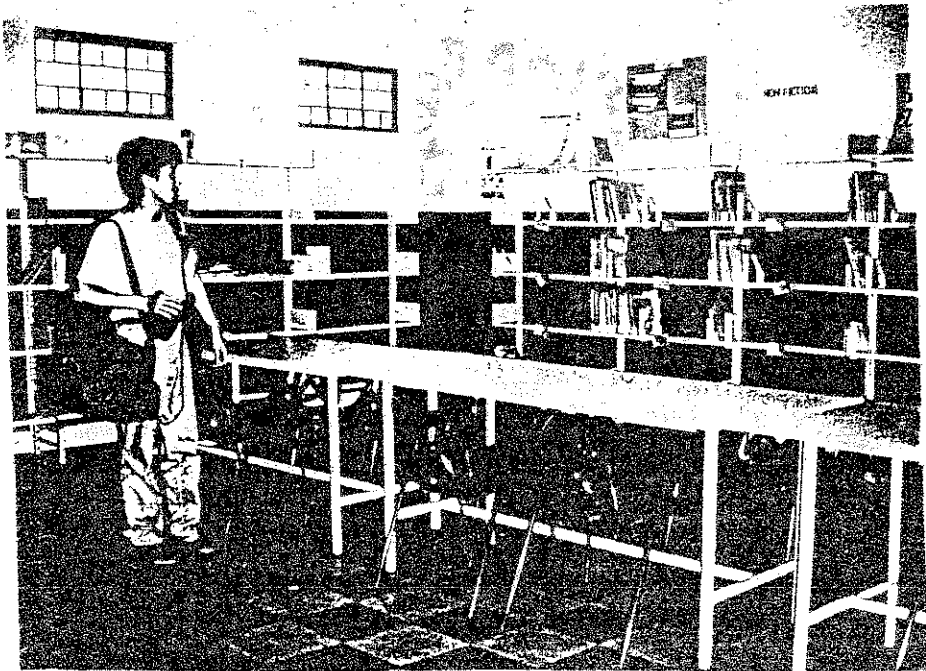
子を自宅に預かりながら、自分の勤務する学校についていけない生徒を自宅に招き、時間をかけて教えている。

子供たちはわれわれを大歓迎してくれた。きらきら光る目を持つ子供たちに囲まれるとこの子供たちにできるだけ援助したいと思わずにいられなかった。われわれの送った本は黒人の手元に届いており、活用されている。しかし、全く足りない。辞書、地図、歴史の本、絵のついているような子供向きの本、これらの本はいくらあっても足りなくらいだ。また日本の中学校で使う英語の教科書もわれわれが考えていた以上に有用だった。

#### ダーバン市におけるELETの活動

ベントレイ氏は1冊のファイルをわれわれに見せて、これだけが自分の”オフィス”だと言った。ベノニの場合は、われわれの送っている本は、ベントレイ氏とその周囲の個人的な努力により黒人に分配されている。それに対して、ダーバンで英語の本の受け取りを引き受けてくれているELETは大変大きい組織であった。ELETはENGLISH LANGUAGE EDUCATIONAL TRUSTの略である。ELETの活動のすべてを記すことはできないが、活動の一つであるフィールドワーカーの養成のことについて書きたい。ELETは英語そのものを学ぶコースと英語を教えるテクニックを学ぶコースをもってフィールドワーカーの研修を行なっている。研修を受けたフィールドワーカーは一人20校くらいの学校を担当し、実践している。このようなフィールドワーカーがELETには21人いる。一人のフィールドワーカーが担当する地域に平均80校の学校があるそうだが、カバーできるのは20校である。ELETの指導による授業をいくつか見学した中でも、その日の新聞を生徒一人一人に1部ずつ配り教材として授業を進めていくものが興味深かった。ダーバンで訪れた学校は比較的豊かな地域の学校であったが、それでも本がない。ある学校ではOHPを利用してわれわれが送った本を教材に授業を行なっていた。OHPがある学校はあまりないようだがそれにしてもOHPが在りながら生徒に本がないというアンバランスには驚かされた。

ダーバンからかなり離れたサウザンドヒルという所にあるVALLEY TRUSTという組織も訪れたが、ここにも図書館はあっても本棚はガラガラであった。ELETでは数少ない本を地域ごとに移動させて活用しているが、これはわれわれの移動図書館の構想と非常に近いものだと思われる。



数万人の住民をかかえるコミュニティにただひとつある図書館にも本がない。

### スクウオッター キャンプを訪ねる

ダーバンを去り、ペノニに戻る。JVCのプロジェクトのあるジェフスピルのスクウオッターキャンプを見学した。ある黒人の家庭ではJVCの高梨氏を自分の息子だといって歓迎していたのが印象的だった。電気や水道、下水などが不備で家も、どこかで拾ってきたようなトタン板でできている。しかし家の中はとても整理されており、美しく飾られていた。快適なものにしようと努力しているのだろう。それでも夏はトタン板が焼けてものすごく暑く、冬は心底寒そうだ。JVCの援助で保育園やトイレが作られている。

### 黒人の子供たちが尊敬をもって生きていけるように

英語の本を送る。これは間違いなく有用なことだ。識字は黒人が尊敬をもって生きていくために必要であり、英語は世界に向けて開かれた言語だ。輝く目をもった顔でくっつくなく笑ってわれわれを歓迎してくれた黒人の子供たちに明るい未来があるように尊敬をもって生きていけるように願わずにいられない。そして、そのためにできることをすることが、日本人にとっても人間らしく生きるために必要なことだと思うのである。

この旅ではベントレイ一家やELETの職員の方々、JVCの津山さん、高梨さんなど大勢の方にお世話になった。また写真家のV. マトム氏やアフリカ行動委員会の松島多恵子氏にもお会いでき、お話を聞いた。この旅の経験を会の行動に活かすことにより、ご恩に報いたいと思う。  
(下谷 房道 記)



JVC(日本国際ボランティアセンター)の作った首都プレトリア近郊の保育園。  
石川県小松市立中学校の皆さんが手で縫いあわせて作ったキルトをプレゼントする。  
机や台がないので、床で縫を描いていた。ここにも去年、絵本を送った。

## 黒人学校の教員へのアンケートの結果

アンケートには24名の学校の先生が協力してくれました。ヨハネスブルグ近郊のメソジスト教会で、日本から出かけた2人と本の分類、配布を行なう前に記入をしてもらったものです。以下はその結果をまとめたものです。

今までに本を受け取った学校は15校で、受け取った本の数は100~200冊が主流でしたが、10冊、400冊と答えた人がいて多少のばらつきが見られました。受け取った学校の先生は皆、本は現在使用されていると答えており、ほぼ全員が貸し出しの方法で有効にかつ頻繁に利用していると答えています。利用状況に関しては、授業でも本を参考書などにして使っている学校が多らしく、英語の勉強に大変役立っているという答えが目立ちました。また、各生徒に1カ月に1冊本を借りるように勧めたり、読書時間に英語のリーディングに使用したりと、積極的に柔軟な方法で本を活用しているようです。

送る本に対する要望は、数を増やしてくれという意見が圧倒的でした。本以外に欲しいものは教材、特に、テレビ、ビデオ、コピー機、カセット・レコーダー、コンピュータなどのハイテク機械を挙げた人が多かったのが印象的です。

私たちの会に期待することは、これからもより多くの本を送って欲しいという要望のほか、送られる本の使い方を報せて欲しい、教育のガイドラインを送って欲しい、実際自分の学校に来て現状を見てもらいさまざまな提案を出して欲しい、本の知識を深めるため先生や図書館員を日本に送らせて欲しいなど、さまざまでした。

学校がかかえる問題点は、生徒数に対して先生や教室の数が絶対的に足りない、学校や勉強に興味を失っていたり学習上遅れや問題のある生徒が多い、先生の質が低い、設備が整っていないなどで、その対策として学校の全体的な質の改善を求める声が多く、補習の必要な生徒のために補習学校や補習学級を設ける、代表的教育組織が日本の学校を訪問してアイデアを得るなどの具体案が挙げられています。

<感想> 私たちが送った本は効率的に利用されているようですが、とにかく本が足りないのもっと本が欲しいという切実な声が続いてきます。また、学校はあらゆる面(生徒、先生、設備等)で深刻な問題をかかえているようです。しかし、先生の意見や要望から、これらの問題に前向きに取り組む、今後私たちの会とも直接に緊密に協力しあっていきたいという積極的な姿勢が感じられました。(アンケートまとめ 中野 祐子)

### 1993年度 「アジア・アフリカと共に歩む会」決算報告

収入の部		支出の部	
寄付金	3,573,882	輸送費	1,419,111
助成金	800,000	通信費	190,710
利息	542	交通費	49,170
繰越金	366,461	講演費	28,785
		接待費	6,746
合計	4,740,885	事務費	77,043
		援助物資	700,000
		現地視察費	655,957
		雑費	61,928
		合計	3,189,450

差引残高 1,551,435 1994年度へ繰越  
上記の通り報告いたします。  
1994年3月31日

会計

吉田 眞子